

高等修身教科書 卷二

4
90

K/20.1
128a
2

樋口勘次郎
野田瀧三郎
合著

高等修身教科書卷二

東京

金港堂書籍株式會社

- 第一課 今上天皇陛下(御武徳)
- 第二課 北畠親房卿(一)文武無備
- 第三課 北畠親房卿(二)難に堪ふ
- 第四課 北畠親房卿(三)父子の忠
- 第五課 北畠親房卿(四)皇統の正論
- 第六課 公に奉ず
中江藤樹先生(一)道に志す
- 第七課 中江藤樹先生(二)親を慕ふ
- 第八課 孝行
中江藤樹先生(三)僕を愛しむ
- 第九課 おもひやり
- 第十課 中江藤樹先生(四)奉養
- 第十一課 中江藤樹先生(五)教授
- 第十二課 中江藤樹先生(六)忠憤を戒む
- 第十三課 中江藤樹先生(七)惡人を化す
- 第十四課 中江藤樹先生(八)道徳
- 第十五課 春日局(一)志を達す
- 第十六課 春日局(二)輕重を知る
- 第十七課 女徳
- 第十八課 貝原益軒先生(一)學問の目的
- 第十九課 貝原益軒先生(二)學問の體育
- 第二十課 貝原益軒先生(三)學問の養生
- 第二十一課 貝原益軒先生(四)忠臣を平ふ
- 第二十二課 恭謙
- 第二十三課 貝原益軒先生(五)親切なる著書
- 第二十四課 公徳
- 第二十五課 外國人と交る心得

高
文
書



高
文
書
卷
一
一

第一課

今上天皇陛下(御武徳)

今上天皇陛下、夙に武事に大御心を用ゐ
させられ、陸海軍を親しく統率し給ひて、其
の大演習には、必ず臨ませられ給ふ。

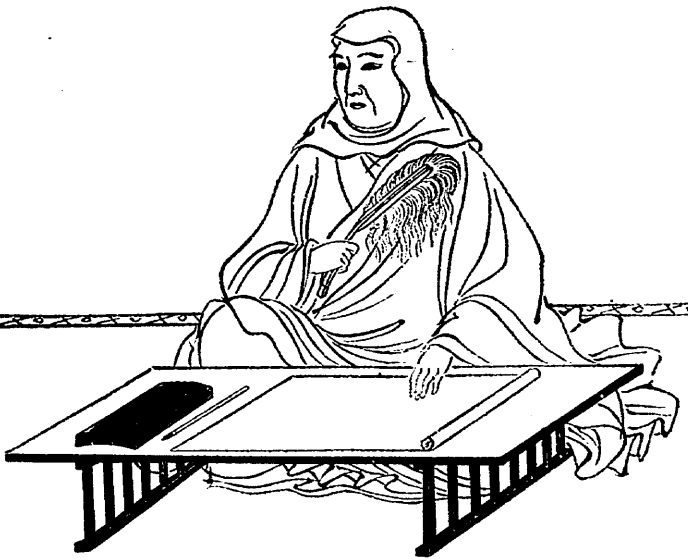
陛下の大演習に臨ませ給ふや、一般軍人
とよく其の勞苦を共にせられ、風雨、霜雪を
厭はせられず、山野を跋渉せられて、少しも
御倦怠あらせられず。

宮城内に振天府といふを建てさせられ、
明治二十七八年の戦役に關する種々の物
品を陳列せさせ給ふ。中にも戦役に従事し
て、名譽の死を遂げたるものは、將校より士
卒に至るまで、皆、其の姓名を名簿に記載し、
立派なる巻物となして、保存せさせ給へり。
其の軍人を重んぜさせ給ふ一斑を知り得
べし。

第二課 北畠親房卿(一)文武兼備

北畠親房卿は村上天皇の後裔にて、少壯より才藝、衆に秀で、和漢の學に達し、加ふるに勇氣、人に越えて、忠誠の志、深かりき。

後醍醐天皇、英明にましくして、當時、北條氏の亂暴、甚だしきを憤り給ひ、朝政を古に復せんと、の御志、固かりければ、早くも此の卿の並々ならぬ器量あるを見ぬき給ひ、



進めて大納言に任じ、大政に參與せしめ給ひき。卿はもと文官の御家筋なりければ、初めの程は專朝儀、典禮の事をのみ司られしが、是

に至りて、聖主の知遇に感激し、ますます忠義の志を固められたり。

第三課 北畠親房卿(三) (難に堪ふ)

かくて、卿は 天皇を輔けまつりて、北條氏征討のことに力を盡されしかど、時未だ至らざるにや、笠置の行在所の軍破れて、天皇は隱岐の小島にさすらひ給ふ御身とならせられたり。

天運一旦改りて、忠臣四方に起り、北條氏も時のまに滅びて、王政古へに復し、卿の親任せらるること益重く、大政に參し、軍事にも與かられたり。

然るに、足利尊氏反逆して、京都に攻め上りしかば、卿は 天皇に従ひて、叡山に赴き、長子、顯家卿を召して、行在を守り、義貞、正成の二卿等と謀を合せて、敵を破らしめたり。

尊氏一旦九州に逃れ、更に大兵を率ゐて、京都に攻め上るや、官軍戦ひて、利あらず、忠臣多く戦に没して、天皇再び叡山に幸し給ふ。卿は皇子を奉じて、伊勢に赴き、大いに義徒を集め、恢復を圖られけるが、天皇吉野に潛幸し給ふに及び、急ぎ馳せ行き、政務を賛け奉られき。

第四課 北畠親房卿(三)父子の忠義

是より朝廷、南北に分れて、天に兩日あるが如き世となり、卿は日夜、南朝の爲めに心を盡されしかど、勢漸く競はず。顯家卿も遂に、安倍野にて戦死せられき。

をりふし、奥州の結城宗廣といふもの、参内して、出羽、奥州の人心、變ぜざる先に、官一方下し、参らせたと申しければ、乃ち親房卿の二子、顯信卿、鎮守府將軍となりて、義良

親王を奉じ、親房卿、之を輔けて、宗廣と共に再び、奥州にど下られける。

然るに、此の一行、海中にて暴風にあひ、親王及び顯信卿の船は、伊勢に吹きつけられ、親房卿は常陸へ漂著せられたり。親房卿、乃ち所在の義徒を集めて、賊と苦戦し、敗れて小田城によりしに、高師冬、大舉して來り攻む。卿、援を陸奥の結城親朝に請ひしも、親朝、

窃に足利氏に通じて、之に應ぜず。親朝は宗廣の子なり。是より先、宗廣は伊勢に漂流して、病を得、死に臨みて「我死なば、人の弔ふを願はず、唯、朝敵の首を墓前に供へよ」と遺言せり。か程の忠臣の子なればとて、親房卿、再三、親切に親朝を諭されぬ。

第五課 北畠親房卿(四)（皇統の正論）

親房卿が、親朝に諭して、南軍の振はざる

を歎き、大義の忽にすべからざるを述べられたる文書は、今も尚残れり。此の時、親朝、尚之に應ぜずして、辭するに兵少きを以てし、しかして、師冬の兵いよ／＼城に迫りければ、卿は城をすてて、吉野に還られたり。

卿、深く當時、世道、人心の敗類して、大義、名分の明かならざるを慨き、後村上天皇、行在に即位せさせ給ふにあたり、神皇正統記

を著されたり。傳へいふ、北朝の諸卿が南朝の諸公を稱するには、皆、其の官職を認めざりしかど、獨、親房卿のみは准后と稱して、絶えて其の名を呼ばざりき。といふ。卿は、老後、三宮に准ぜられたればなり。

卿の如きは國の爲めに、文武、兩つながら、つくされたる忠義の大臣といふべきなり。

第六課 公に奉ず

日本國民と生まれたるものは、誰か皇室の御惠みに浴せざるものあらん。されば、御國の爲めに力をつくして、御恩の萬分の一をも報い奉らんと、常に心掛くべきこといふまでもなし。

奉公の事はあながち、軍人とならざれば、行ひがたしといふにあらず。元より日本は、全國皆兵といふ制度にて、一旦、緩急あらば、

老幼を除きては、皆、自ら戦ふ覺悟ならざるべからざれども、平時にありては、よく自分の職業に力をつくすこと、是又、奉公の一つなり。

第七課 中江藤樹先生(二) (道に志す)

世に近江聖人といふは中江藤樹先生のことなり。近江は先生の生まれられたる國なり。先生は幼き時より行儀、正しく、よく父



母の命を守られしが、十歳のとき、祖父と共に、伊豫の國に移られたり。

かつて、大學を讀みて、「天子より庶人に至るまで、身を修むるを本とす」といふ處に至り、深く感じて、我も身を修めて聖人とならんとして、是より一心に學を修め、行を正されたり。

當時、人皆、専ら武藝にのみ心をかたむけ

たれば、先生の書を読まざるを見て、之をしりたれども、先生は期する所あれば、少しも心にとめられざりき。

第八課 中江藤樹先生(三) (親を慕ふ)

先生、十四歳のとき、祖母、病にかゝり、種々、手をつくして、看病せしかど、其のしるしなきて、此の世を去り、其の翌年、祖父、又、身まかりければ、先生はいたく力をおとされたり。

かくて、十八歳にて、祖父のあとをつがれ、よく其の役をつとめられしが、程なく、國元の父、なくなられたるよしの知らせ來りしかば、先生の悲しみは、一方ならざりき。

かく、重ね重ねの不幸にあひしかば、今は、ただ、一人の母に孝をつくすより外なしとて、時々、歸國して、母をなぐさめられしかど、勤めの身は思ふにまかせず、母は又、他國に

行くことをきらはれければ、今は勤めを辭して、母の側に侍するより外に仕方なしとして、當時藩主の信用を得たりしに拘らず、屢暇を願ひ、遂に、年、二十七歳のとき、再び近江に歸り、朝夕、母に事へて、孝養をつくされたり。

第九課 孝行

親に孝をつくすは是、最も手近なる善行

にして、又、最も大切なる道德なり。

凡そ、人にして其の親に孝ならざる程のものにては、必ず何事をもなすこと能はず。即ち修身の第一歩をふみあやまりたるものなればなり。

親に孝なる人ならば、君に事へて忠なるべく、人に交りて信なるべく、其の他すべて何事につけても、道にとむける行はなかる

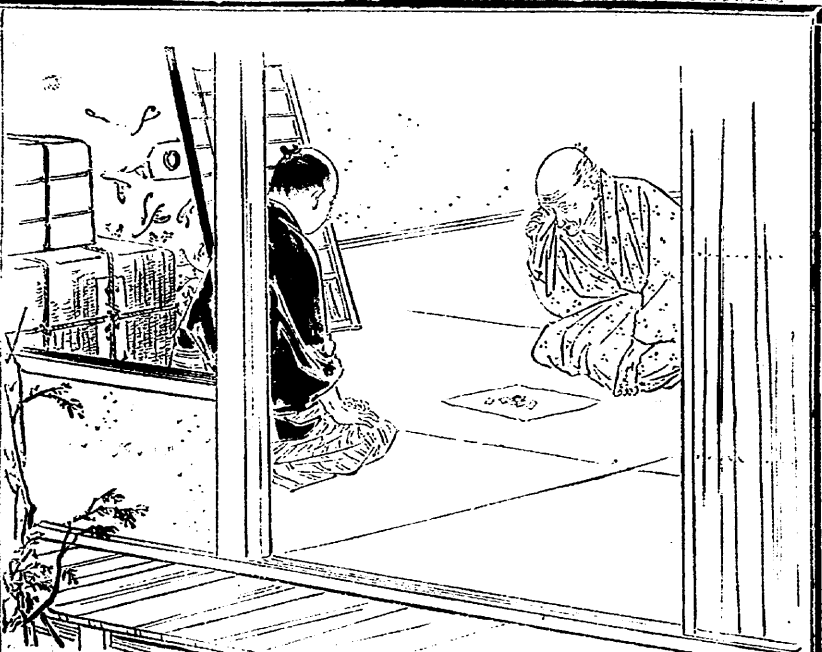
べし。

孝は百行のもと。

第十課 中江藤樹先生(三)（僕を愛しむ）

先生、伊豫に居られけるころ、家に一人の
老いたる召使ありき。先生の恩に感じて、久
しき間、よく事へたり。

先生、去らるるに臨み、あまりたる三百文
の錢の中、二百文を之に與へて、さても、長の



年月、よくも誠實
につかへくれた
る事よ。今、予國に
歸るにより、そち
をも共に召し連
れたけれど、思ふ
にまかせず。是は
まことに少けれ

ども、予の志なれば、辭退なく、うけてよ。」といはれたり。

召使はいたく、先生の徳をしたひて、「是非、お供して。」と、申し出でしかど、いろく、さとされければ、泣くく、思ひとゞまりぬ。

第十一課 おもひやり

すべて、人を使ふには、おもひやりといふこと大切なり。たとひ、金錢を以て雇ひ入れ

たるものなりとも、ひどくなる使ひ方を、なすべからず。必ず、よく、あはれみをかくべきことなり。

わが身をつめりて人のいたさを知れ」
雪の日やあれも人の子たるひろひ」

第十二課 中江藤樹先生(四)（奉養）

先生、近江に歸られて後は、母に孝養をつくさるること、一方ならざりき。曾て人に語

りて、我、他郷にありし間は、親のこと常に氣にかゝりて、安くねられざりしが、今は母の側に來りて、親しく其の安否をうかがふよゝになりたる爲めか、夜も安々とねらるることになれり」といはれたり。

されど、家、まづしくして、母を養ふにも、事かけがちなりしかば、専ら、けんやくを守り、粗末なる衣服、粗末なる食事に甘んじて、一

切むだなる費用をはぶきしかば、後には、富めりといふにあらねど、母を養ふには、充分さし支へざりき。

第十三課 中江藤樹先生(五)教授

かくて、先生の徳行、次第に遠く聞えわたりしかば、四方より教を乞ふもの、やうやく、多く至りたり。

先生の門人を教へ導くは、たゞ、文字、文章

を講ずるのみならず、其の主意、實地に善行をなさしむるに在り。先生、常の言に、「學問は智をひらくのみならず、身を修め、世を益するに在り。」とて、おのれ、まづ、身を修めて、其の手本となられたり。

されば、先生の門人は、皆、之に勵まされて、いづれも智と徳とを研ぎ、世に益をなさんと勉めたり。熊澤蕃山先生の如きは、即ち、此

の門人中にて、最も名高かりし人なり。

第十四課 中江藤樹先生(六) (怠惰を

戒む)

先生の孝心、深かりしことは、前に既に説きたる所にて知らるべし。されば、門人に説き、さすにも、孝行を第一とせられ、毎朝、自ら孝經を讀み、又、門人にも之を讀ましめられたり。

先生は最も時間を惜まれ、朝は四時にお
き、夜は十二時に卧し、其の間、少しの懈怠あ
ることなし。されば、怠惰をにくむこと甚だ
しく、常に門人を戒めて、古へより、學に志し
たるもの多し。而もよく大成するもの少き
は、即ち怠惰なるによる。』といはれたり。

かくの如く、先生の教は、先づ、自ら身につ
とめ行ひて、後、人に及ぼすことなれば、殊更、

之をすゝめられざりしかど、其の徳行、唯に
門人のみならず、四方の人を感化して、遂に
近江聖人の名を得、天下、誰、知らぬものなき
に至れり。

第十五課 中江藤樹先生(七)悪人を

化す

先生、或る夜、おとく家に歸らんとせられ
しに、盜賊、數人、途中にて先生をとりかこみ、

「錢をわたせ」といふ。先生、しづかに、とこばくの金を渡されたるに、賊ども之に満足せず、
「錢なくば、衣服をぬげ」と、刀をぬきておびやかしたり。

先生、しばらく考へて、我は、いはれなく、人に衣服をはがるるわけなし。此の上は是非に及ばず、汝等と戦ふべし。さるにても戦ふものは、名のり合ふを法とす。我は中江與右

衛門なり」と呼ばはられしかば、賊ども聞き、
て、さては、中江先生にてありつるか。かかる尊き御方とも知らず、無禮いたしたることの恥かしきよ。今よりは、かかるあさましき行を改むべければ、何とぞお弟子になし下されたし」と、ひたすらあび入りしかば、先生は心よく之を許されたり。

第十六課 中江藤樹先生(八) (遺徳)

先生、なくなられて後の事なるが、或るとき、尾張の士、西近江を通り、さても世に有名なる近江聖人の墓に、參詣せんとして、一人の農夫に尋ねたるに、「某、御案内いたすべし」とて、やがて、おのが家に入りて、新しき單衣に、小紋の羽織を著かへて、來りたれば、さても丁寧なる人もあるものかな、と思ひつゝ、從ひ行けり。

さて、墓所に至れば、農夫は竹垣をひらき、「いざ拜し給へ」といひて、おのれは遙かさがりて、拜伏したり。士は之を見て、「さては、かれが衣服を著かへたるは、先生を敬ふによりてなり」と思ひて、「御身は先生にゆかりある人にや」と問ひたるに、「いや、さにはあらねど、此の村のものにて、一人として、先生の恩をかふむらぬものはなし。我等、いやしけれど

も、幸に人の人たる道をわきまふる程に至りしは、ひとへに先生の賜なり。いかで敬はざるべき。と、こたへしかば、士は之を聞き、ますます先生の徳に感服せり。

風をうつし、俗をかふ。

第十七課 春日局(一) (志を達す)

春日局は幼き時より、膽力ありて、物覚えよく、且、性、活潑なりしかども、決して友を輕



んじ、弱きを凌ぐなどの事なかりき。かかれば、父母にも孝行に、他人にも深切にして、人、皆、其の行末を頼もしがりしが、長じて後、稻葉佐渡守に嫁して、三子

を生みたり。

其の頃、徳川二代將軍、秀忠公の公子、竹千代君、誕生ありて、公、しきりに、然るべき乳母を求め給ひしが、此の時、局、多くの中より選ばれて、其の保母となれり。

さて局は、竹千代君の保母となりて、おのれの責任の重大なるを知り、かたときも心を忽にせざりき。然るに、御臺所は二男、國松

君、誕生の後、は、竹千代君を愛せられず。下々のものまで、國松君こと、行末、將軍に立たるべき君なれ。などと、もてはやしければ、局は、いと心憂き事に思ひ、さて考ふるに、かくの如きさまにては、御家、後々の亂れの本なりとて、心を決して、祖父の君、家康公に此の事を通じ參らせたり。公、やすからず思し召され、事に託して江戸に來り、二孫を上座と下

座とに分ち座せしめ、且、竹千代君の器量をほめられければ、此に初めて、儲君の事定まりぬ。

第十八課 春日局(三) 輕重を知る

儲君、確定の後、御臺所、世を去られけるより、大奥の事は、局、一人に仰せ付けられて、取りしまりするに至れり。

局は、かく身分、高くなりしかど、甚だ儉素

にて、衣服は、部屋にて縫はせたるものを著け、食膳には、玄米飯に、糠味噌汁、又は赤鰯などを添へたるに過ぎざりき。

家光公、之を聞きて、「年寄の身、何とて今少し、料理を調べざる」と、仰せければ、局、「私事、乳母に召させられたる節こそ、上様の御乳にと存じ、結構なるものも戴きたれ、今は其の御用もなければ、かくなし侍り」と、申したり。

家光公、其の後は何ともいはれず。唯、御膳の品の中より、之をばゞに。とて、下さるること、屢なりきとぞ。

家光公、在職の間、天下の治、大いにあがり、明君のほまれ高かりしは、局、内助の功、興りて、力あること明かなり。公は二十五歳の時、庖瘡に罹りて、甚だ危かりしが、此の時、局は東照宮の神前に詣り、身を以て代らんこと

を祈りたり。局、其の後、病に犯され、最早、終焉と見えける時、公、枕べに至りて、親しく醫藥をすゝめられければ、殿の御心を痛めぬよゝに、とて、飲むまねはしたれども、一滴も、腹には入れざりけり。局は、死しての後も、御代萬世と守り奉らん。といひて、感謝の外、一言も遺言せざりき。

第十九課 女徳

女は萬事、しとやかにして、ひかへ目なるをよしとす。されど、心にたしかなる所ありて、みだりに、人にこびへつらふが如きことあるべからず。殊に、人の家に嫁しては、夫に貞操なるはいふまでもなく、舅姑に事ふるにも、よく孝行をつくすべし。

平生、物事をつまやかにして、むだづかひせず、かねて読み書き、算用、裁縫、料理、髪ゆひ等を心得居て、手紙のやりとり、金錢の出し入れ、衣服の仕立、朝夕のまかなひ、來客のもてなし等、一切の家事を善く治め、子女あるときは又、其の教育に深く心を用ゐるべきなり。

第二十課 貝原益軒先生(一) (學問體育)

貝原益軒先生は筑前の國、福岡なる黒田家の臣にて、寛永七年に生まれ、稚き時より、

かしてくして物覚えよかりき。

九歳の時、藩の學校に入りしが、元來、物事にさとき上、よく勉強せられしかば、學問、忽ち上達して、他の學生を拓どろかす程になられたり。

然るに、先生は至って、體よわくして、思ふまゝに、勉強なりがたかりしかば、深く學問を修むるには、體よわくてはかなはず。體を



強くするには、醫術を知らざるべからず。と、思ひて、是より醫學を修め、養生に注意せられしかば、次第に、すこやかになられて、勉強も、思ひのまゝに出來、學問の上達も著しかりき。

それより、心をひとめて、更に勉強し、十年の間に、あらゆる和漢の書籍を研究せられしかば、學業、大いに進みたり。されば、一藩の人々、こどりて先生を敬ひ尊び、しかして、藩主より、京都に遊學すべきよしの仰を下し給へり。

第二十一課 養生

いかに其の志ありとも、身體、健かならざれば、事業を成し果すことは、かたかるべし。さるを、一時の慾に制せられて、或は過食し、或は運動を怠りなどして、遂によき身體を

も、あしくするものあり。かくの如き心掛に
ては、遂に大業をなすことは能はざるなり。
貝原益軒先生が、生まれつき弱き身體を
以てして、しかも、よく名高き人となられた
るは、其の初め、養生に心を用ゐられたるに
よる。されば、先生も深く養生の必要なるこ
とを感ぜられ、世の人をして、廣く養生の法
を知らしめんとして、後に、養生訓といふ書を

著されたり。

活潑なる精神は健康なる身體
に宿る。

第二十二課 貝原益軒先生(三)學問

の目的)

益軒先生、藩主の命を受けて、京都に上ら
るるとき、つらく思はるるより、學問は何
の爲めに修むるか。身を修め、家を整へ、國を

利し、世を益する爲めに外ならず。されば、みだりに深きをむさぼり、高きにはほこるべきものにあらず。つまりは之を身に行ふに在り。とて、あざと他人の門弟ともならず。唯、學者の講説を聽きては、自ら考へ、疑あれば聽きたゞしつゝ、修業せられたり。

かくて、三年の後には、學業、一層、進み、行もすこぶる正しくなりたれば、其の名、漸く諸

方に聞えわたり、上は公卿より下は尋常の人に至るまで、皆、其の門に入りて、教を聽かんことを希へり。

學業、成就の後、藩に歸られければ、藩にては直に、其の學校の教授となして、手厚くもてなし、祿高までも増されたり。

かく、藩に居りては上下の尊敬を受け、其の名は四方に聞えたれども、先生は、もと謙

遜の人なりしかば、自ら學問ありとせず。少しも、人にほこることなきのみならず、反つて、いよく、へりくだり、ますく、修學に心をひとめられき。

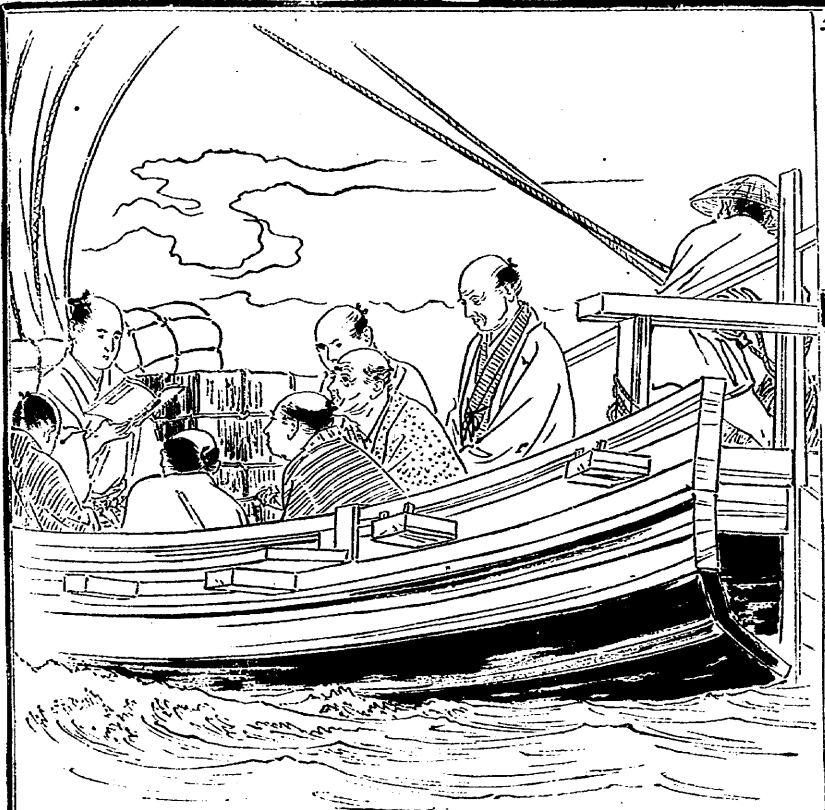
第二十三課 貝原益軒先生(三)(謙遜)

先生、曾て京都より大阪に出で、海路にて歸國せられたることありき。

同船の人々、退屈なるまゝ、四方山の物語

して、日を重ねけるが、別に互の姓名を名のり合ふ程の事もなし。其の中に、一人の年若き男あり。頗る、おのれが才藝に誇るさまにて、人々に向ひ、揚々として經義を講じけるに、先生は例の恭黙して、之を聞き、一言の是非をも論ぜられざりき。

かかりし程に、船やうやく港に著きければ、人々上陸して、さて、始めて各、其の郷里、姓



名を告げ、
 再會を契
 りて、別る
 るに及び、
 先生も「某
 は、福岡の
 人、貝原久
 兵衛と申

すものなり」と、名乗られければ、之を聞き、
 彼の男、大いに愧ぢ、おのが名を告げずして、
 いづくともなく逃げ去りぬ。

第二十四課 貝原益軒先生(四)忠臣
 を弔ふ

先生、又、曾て湊川を過ぎ、楠公の墓の荒れ
 たるを見、かくてあらんには、公の忠義も遂
 に、世に忘れ果てられんことを慨き、即ち公

の忠義を石に記して、遺跡を永く存せんと、兵庫の富商、某に相談せしに、某も心あるものにて、いたく之を喜び、早速、諾ひしかば、即ち碑文を撰みて、與へられたり。

其の後、先生、かの某にいひおくらるるよし、楠公の勲功は日月にも比ぶべきに、余が如き淺學の筆もて、碑文を記さんは却つて之をけがすの恐れあり。されば此の事は思

ひとゞまりたり。そこつに約したる罪は許されよ。とて、遂に之を見合はされたり。其の謙遜にして、篤實なること、大方、かくの如し。

第二十五課 恭謙

人と交るには高慢なるべからず。高慢なるときは、人、我をきらひて、遂に交らざるに至るべし。

おのれだに、眞實に、學徳あれば、とを殊更、

人にときしめさずとも、人、自然に之を知りて、我を敬はざることなし。見よ、益軒先生は學徳、一世に高かりしかど、其の恭謙なること、かれが如し。而して、世の人、皆之を尊敬してやまず。よく思ひみるべし。

第二十六課 貝原益軒先生(五)親切

なる著書

益軒先生は學問を修め、書籍を讀み、道理

を知るのみを以て満足せられず。凡と、善事は必ず身に行ひて、更に世の人をも教へ導かんとして、多く書を著されたり。

是等の書籍は、皆、たやすき言葉をつかひ、讀みやすき文字を用ゐて、何人にも解し得るよゝにし、なるべく、多くの人に讀まれんことを望まれたり。

かくて、八十歳以上に至られしまで、筆を

とりてやめられず。著されたる書籍は凡そ百種に上れり。中につき、五常訓、家道訓、養生訓、大和俗訓、童子訓、初學訓、文訓、武訓、樂訓、君子訓等は最も有益の書なり。謂はゆる益軒先生の十訓とは是なり。

かくの如く、先生が智能、徳器、兩つながら成就して、世の益をなすに至られしは、もとより先生の工夫によることなれど、其の内

室の助も亦少からずといふ、内室は名を初子といひて、先生にとつぎてより、よく舅姑に事へ、家政をととのへて、先生に心配なからしめたり。然のみならず學問、才智ある人なりしかば、先生の著述の手傳をさへせられたり。眞に婦女のかゝみといふべき人なりけり。

第二十七課 公德

我が國の人は時間を守る念薄し。時間をよく守らざるは怠惰の本なり。

とも自分一人のみの事ならば、之が爲めに、多くの人の害となることもなかるべけれど、人と約束して、よく其の時間を守らざるが如きは、他人に迷惑をかくるものにて、甚だ、あしき所行なり。

此に友人、七八名と遠足せんとして、明朝、七

時半に集るべし。と、約束し、而して、翌朝早く、おくることのつらき爲めに、約束をたがへて、一時間もおくれたるものありとせよ。かかる場合には、他の正直なる友人は皆、空しく一時間を費さざるべからず。是、自分、一人の時間を守らざるより、多くの人の迷惑となる一例なり。

かくの如く、時間を守らざれば自分、一人

のおこたりより、他人に迷惑をかけ、其の上、
自分も遂に人より信用せられざるに至る。
されば、人の爲めには勿論、自分の爲めにも
時間は、必ずよく守るべきことなり。

第二十八課 外國人と交る心得

外國人と交るによく禮を以てし、且又、之
をいたはりて、假りにも無禮の所行あるべ
からざることは既にいひたり。

すべて、外國の人は我が國の様子を十分
知らざれば、初めて交りたる一二の人の舉
動を見て、やがて日本全體の人もかからん
と推察するものなれば、彼に交るには唯一
人として交るのみならず、日本國民として
交るといふ心掛なかるべからず。

かかる心掛を以て交るときは、或は信義
をないがしろにし、或は約束を守らず、或は

禮を失する等のあしき所行は必ず出て來らざるべし。何となれば是たゞ一人の不面目なるのみならず、日本人民全體の體面を汚し、且、傷つくる恐れあればなり。

明治三十四年五月十四日印
 同三十四年五月十七日發
 同三十四年八月十日訂正再版印刷
 同三十四年八月十四日發行

高修身教科書
 定價 卷一金十九錢 卷二金十九錢
 卷三 金二十錢 卷四金二十二錢

著作權所有

著作者 樋口勅次郎
 著作者 野田龍三郎
 發行兼印刷者 金港堂書籍株式會社
 代表者 右社長 原亮一郎
 賣捌所 各府縣特約販賣所

東京市下谷區龍泉寺町四百十四番地

◎弊社ハ常ニ書籍ノ用紙印刷製本等ニ注意シ勉メテ其ノ堅牢ヲ期セリサレド多數ノ中萬一學年間ノ使用ニ耐ヘザルガ如キ粗製ノモノアラバ御通知次第無代價ヲ以テ御引換申スベク候
 ◎本書ハ僻遠ノ地ニ至ルモ定價ヲ超過シテ賣捌カシムルコトナキハ勿論直接ノ御注文ハ多少ニ拘ラズ運賃ヲモ負擔仕ルベク候

高等修身教科書

卷三

4
90

K120.1
128a